

室田保夫著『近代日本の光と影―慈善・博愛・
社会事業をよむ―』関西学院大学出版会、二〇一二年

杉田菜穂

一

「本書はこれまで書いた論文のなかで社会事業雑誌関係のもの一般的なそれもキリスト教関係の紙誌が多いですが、その紙誌から何を讀むことができるか、あるいは慈善や博愛、社会事業といった概念がいかに報道されてきたかについて発表してきた小論を一冊にまとめたもの」（四四九頁）とされる『近代日本の光と影―慈善・博愛・社会事業をよむ―』は、四五〇頁を超える大著であること、古いもので一九七八年、新しいもので二〇一一年に発表された論文が収められているということだけでも大変重みのある学術書である。一方で、著者は本書を「序説」ないしは「基礎的な研究」であるとしている。本書の副題となっている慈善・博愛・社会事業といった「言葉」をいかによみ解いていくか、あるいは近代社会というなかでこれらの「言葉」がいかなる意味を有しているのかという課題と向き合うための。

本書の主題（タイトル）は、『近代日本の光と影』である。著者によれば、近代日本をめぐる「光」が「アジアを脱して西欧に追いつくことができ、アジアの『盟主』として『大国主義』を標榜し、国際社会での地位を築けた」（四四三頁）ことであるとすれば、それを補完する「影」の部分の一つが今日という社会福祉の対象領域である。そして、この「影」の部分はこれまで十分に歴史のなかに位置づけられてこなかった。「もう一つの近代」と呼ぶべきこの「影」に光を当てることで、近代の総体が見えてくるのではないだろうか。具体的には、囚人、孤児、棄児、娼婦、非行少年、貧者、障害者と呼ばれた人々を支援する団体や事業家の足跡に関する実証性を重んじた調査研究によって慈善や社会事業といった言葉が如何なる中で人々の間に浸透していくのを見てとれるのではないだろうか。さらに、その言葉は近代という時代に如何なる意味を形成していくのだろうか、といった問いと向き合うのが本書である。

先走って著者の問題意識に触れてしまったが、本書の構成は以下の通りである。

序 社会福祉の歴史研究についての覚書

第一章 近代日本の監獄改良

第一節 「北海道バンド」と『教誨叢書』

第二節 「北海道バンド」と『獄事叢書』

第二章 近代日本の孤児と非行、そして慈善

第一節 石井十次と『岡山孤児院新報』

第二節 留岡幸助と『人道』

第三章 近代日本の貧困、娼婦、病氣、そして矯風

第一節 山室軍平と『ときのこと』

第二節 『東京市養育院月報』をめぐって

第四章

博愛社の機関誌から慈善・博愛・社会事業をよむ

第一節 小橋勝之助と『博愛雑誌』

第二節 博愛社の機関誌『博愛月報』をめぐって

第三節 林歌子と『博愛月報』

第五章

キリスト教紙誌から慈善・博愛・社会事業をよむ

第一節 『七一雑報』にみる慈善、衛生、救済論

第二節 『六合雑誌』にみる慈善・博愛事業について

第三節 鈴木文治と『六合雑誌』

第六章

仏教雑誌から慈善・社会事業をよむ

『六大新報』にみる真言宗の社会事業

結びにかえて 近代日本の光と影

二一

本書は、近代日本における社会事業をめぐって「監獄改良」や「孤児と非行」、あるいは「キリスト教紙誌」や「仏教雑誌」といったテーマごとに編まれている。それを雑誌刊行年をもとにして時系列で整理すると、左図のようになる。

以下、本書の記述に沿ったそれぞれに関する説明をごく簡潔に記してみよう。

(筆者作成)

1：雑報社

『七一雑報』（雑報社、1875年創刊）

→第5章 第1節

2：東京青年会

『六合雑誌』（東京青年会、1880年創刊）

→第5章 第2・3節

3：博愛社と岡山孤児院

3-1：博愛社（兵庫）

『博愛雑誌』（博愛社、1890年創刊）

→第4章 第1節

※ 1891年 博愛社と岡山孤児院の合併

↓

※ 1893年 博愛社と岡山孤児院の分離

↓

3-2：岡山孤児院

『岡山孤児院月報』（岡山孤児院、1893年創刊）

『岡山孤児院新報』（岡山孤児院、1896年創刊）

→第2章 第1節

3-3：博愛社（大阪）

『博愛月報』（博愛社、1899年創刊）

→第4章 第2・3節

4：同情会

『同情』のち（第5号から）『教誨叢書』（同情会、1892年）

→第1章 第1節

『獄事叢書』（同情会、1894年）

→第1章 第2節

5：救世軍

『闕聲』のち『ときのこゑ』（救世軍、1895年創刊）

→第3章 第1節

6：東京市養育院

『東京市養育院月報』（東京市養育院、1901年）

→第3章 第2節

7：祖風宣揚会

『六大新報』（祖風宣揚会、1903年）

→第6章

8：家庭学校

『人道』（人道社、1905年創刊）

→第2章 第2節

一…雑報社

『七一雑報』（雑報社、一八七五年創刊）は、一八七五年に神戸で発刊された日本キリスト教界最初の「週刊紙」である。自由民権運動と対応するこの時代は、社会事業についていえば恤救規則の制定（一八七四年）、キリスト教界についていえば宣教師によって従来と違ったヒューマニズム思想が日本に植えつけられていく時期であった。一八八三年に『福音新報』へと引き継がれるまで八年間にわたって刊行された本紙は、キリスト教関係の記事のみならず政治・経済・社会の動きも伝えている。また、決して多くはないが社会事業関係の記事も掲載されているという。

二…東京青年会

『六合雑誌』（東京青年会、一八八〇年創刊）には、当時のプロテスタント慈善事業、キリスト教社会主義の啓蒙・実践が記録されている。書誌の性格だけでなく一九一一年から十五年にかけて編輯に従事した鈴木文治に焦点を当てた考察もなされている。著者は本誌の意義を、積極的に西洋（特に米・英国）の慈善・博愛事業を紹介することで日本の慈善事業の発達に啓蒙的な役割を果たしたことに求めている。また、キリスト教社会主義の人々による社会問題解決策としての慈善事業などが批判され、それが社会問題をめぐる議論の社会科学的視点の萌芽となったともいう。

三…博愛社と岡山孤児院

一八九〇年に小橋勝之助によって創設された博愛社（兵庫）は、キリスト教信仰に基づく教育社団であったが、一八九一年には石井十次（一八八七年、孤児教育会（のちの、岡山孤児院）を三友寺（岡山市）で創設）との交流から岡山孤児院と合併する。

三―一 博愛社（兵庫）

博愛社創設当初の事業構想は、博愛文庫の設置、博愛雑誌の刊行、慈善的夜学校、慈善的普通校の設置、貧民施療

所の設置、感化院の設置、孤児院の設置であり、このうち『博愛雑誌』（一八九〇年）と普通学校（一八九一年）が実現した。『博愛雑誌』に収められた論考には、キリスト教に関するもの、慈善博愛事業に関するもの、博愛社に関するものなどがあつた。一八九一年には、博愛社の財産を岡山孤児院に寄付し、普通学校も岡山孤児院の附属となる。しかしながら、わずか一年半の共同の歩みののち関係悪化により九三年には両者が独自に歩んでいくことになる。岡山孤児院（三一三）から独立した博愛社（三一三）は、一八九三年に若干三〇歳の若さで亡くなった勝之助の志を継ぐ形で、弟の実之助や林歌子の献身などによって博愛社（大阪）は復活をみる。

三一三 岡山孤児院

博愛社との分離独立を経た一八九三年に創刊されるのが、『岡山孤児院月報』である。その発行人兼編輯人となっている小野田鉄弥は、『博愛雑誌』に多くの論文を載せていた。したがって、『博愛雑誌』の延長で把握されるべきであるという。『岡山孤児院月報』（一八九三年～一八九四年）は院内の報告を中心とした機関誌（「非売品」）であり、追つて発刊される『岡山孤児院新報』（一八九六年～一九〇九年）は社説、岡山孤児院日記、論説、福音、雑録、広告、院内記者、教育、史伝、小説、などで構成された。

三一三 博愛社（大阪）

一方、岡山孤児院から独立した博愛社（大阪）は一八九九年に『博愛月報』を創刊する。それは、小橋勝之助の遺言を実現してのものであつた。本誌は慈善や社会事業に関するもの、時論、博愛社に関するもの、キリスト教関係、甲文・追悼文で構成され、当時先進的であつた大阪の社会事業に関する情報提供もみられる。また、明治・大正・昭和期に廃娼や矯風運動、社会事業において精力的な取り組みを行った林歌子についての考察もなされている。

四・同情会

同情会は、「北海道バンド」と（生江孝之によって）名付けられた教誨師集団との関わりで把握される。それは具体的には、J・C・ペリー、大井上輝明、原胤昭、留岡幸助を筆頭に、明治二〇年代に北海道集治監に教誨師として赴任した同志社卒業生を中心とする日本社会事業の草分け的存在のことである。同情会は原によって組織され、一八九二年に囚人向けの『同情』（のち『教誨叢書』）が、それから二年ほど遅れて監獄官吏向けの『獄事叢書』が刊行される。本誌は、当時の北海道の監獄と囚徒の状況、「北海道バンド」の動向理解に役立つとされる。

五・救世軍

救世軍はキリスト教のなかでも社会事業と極めて密接な関係をもった教派であり、その日本での主導者となったのが山室軍平である。『閩聲』（のち『ときのこと』）は、山室が救世軍に入隊する一八九五年に創刊され、救世団に改称されるのに伴って『日本救世新聞』（のち『朝のひかり』）となるまで続いた日本の救世軍の機関紙である。山室の生存期間の紙面は無署名のものも含めて山室の文章が多くを占め、政治的なものは極めて少なく、宗教、道徳、説教的なものが平易に書かれていたとされる。

六・東京市養育院

近代日本における社会福祉施設の濫觴といえる東京市養育院が設立されたのは、一八七二年のことである。一七九一年に老中松平定信が天明の大飢饉への対応として町会所を設立して民衆の救済にあたったのがその起源で、一八七二年の町会所廃止を受けて設立に至ったのが東京市養育院であった。一九〇一年に創刊された『東京市養育院月報』は、慈善事業に関する論説や内外の社会事業の動向と院内の様子報告が中心である。

七・祖風宣揚会

仏教社会事業（ここでは、真言宗）は、一八九一年に濃尾地方で生じた大震災の救援活動や孤児院の経営などの社

会活動から本格的な社会事業へと展開をみる。「宗祖の宣揚」と「社会的汚穢の一掃」、「宗教の真正目的」を達成するために設立された祖風宣揚会の活動（＝近代真言宗社会事業の出発点）をめぐって、一九〇三年に創刊される『六
大新報』、一九一三年に高野山有志が組織した高野学報社の機関誌として創刊される『高野学報』（後の、『高野山時報』）
の社会事業に関する論文や記事として現れた具体的な事業や社会事業に関する思想が明らかにされる。

八・家庭学校

留岡幸助は、一八九九年に非行少年の感化施設「家庭学校」を創設する。その機関誌として一九〇五年に創刊されたのが『人道』である。本書（四・同情会）でも取り上げられている教師時代に監獄関係雑誌の、また米国遊学の
のち『基督教新聞』の編集に携わった経験を経てのことである。慈善・社会事業論、報徳論、地方自治・地方改良論、
教育論、宗教論、時事論、エッセイなどによって構成されており、留岡は革新的とは言えないけれども斬新的な社会
改良に向けて、換言すれば体制内的な改革派としての立場を貫いたとされる。

以上が本論の内容であり、本書は著者がこれまで発表されてきた個別の論文を一冊にまとめたものである。したがって、
それぞれが独立した内容となっているのは否めない。しかしながら、本書の副題である「慈善・博愛・社会事業
をよむ」という問題意識によって本書は貫かれている。著者は、「序」において「慈善や社会事業といった言葉は、
その時代における文化的産物でもある。その言葉は時間という軸と空間という軸とが交差した中に存在している」
（一二頁）と述べて、これらが歴史的相対的概念であることに注意を促している。この点に関わる以下のような課題
提起が、本書の随所でなされていることも見逃すべきではない。

・「我国の歴史を考えてみるとき、社会福祉史の研究にはまだまだ未開拓の分野が如何に多いかが気付かされる。最

近漸く社会史に対して注目されるところがあり、従来取り上げられてこなかった分野においても人々の目が行くようになりつつある。社会福祉の対象としている貧民、孤児、病人、障害者、老人、あるいは保育所、孤児院、救護・教護等の施設、スラム、セツルメント事業、監獄等々、かかる人々や地域、施設、事業が歴史の中で如何なる布置を構成しているのか、あるいは意味を持っているのかを問うていく作業は地味ながら社会福祉学は言うに及ばず歴史学の課題としても重要である。」(一〇六頁)

・「社会主義への行程が慈善事業批判へと向かう点、すなわち慈善事業を批判していく系譜に逆説的に慈善事業のアイデンティティを確立して、後の社会事業成立に向かう要素を提起していくという役割を評価していかねばならない。」(三二九頁)

二二

以上が、本書の骨子である。実に丁寧な書誌的考察である本書によって、先行研究では及んでいなかったところまで立ち入って近代日本における社会事業の実態が浮き彫りになった。独立したように見える個々の章で論じられた内容が、読者の頭のなかで人的ネットワークや思想的つながりによって他の章の内容と関連をもつ。そうして当時の慈善・博愛・社会事業の像が立体的に再構築されることは、本書の大きな美点である。社会福祉、キリスト教、人権、建築、社会政策、教育、看護、労働問題、といった実に幅広い学問領域に及ぶ本書の意義を評者がすべてを理解できているはずもないが、社会政策を専攻する評者なりに思うところ、感じたことを書き留めておきたい。

まず、著者が今日に至るまで発表されてきた研究業績と本書『近代日本の光と影—慈善・博愛・社会事業をよむ—』

の関連についてである。著者は今日に至るまで多数の研究業績を発表されているが、本文のなかでそれらと本書の関わりについて深く言及されていなかった。ところが、本書はこれまでの研究業績との関係性でこそ読まれるべき研究成果なのである。すなわち、著者の初の単著と思われる『キリスト教社会福祉思想史の研究―「一国の良心」に生きた人々』の「後記」のなかに、次の一節がある。「著者は大学院時代に同志社大学人文科学研究所の一つのプロジェクトである『留岡幸助の研究』に参加の機会を得、『留岡幸助著作集』全五巻の編纂作業に携わり、修士論文として『近代日本と留岡幸助』を書き上げたこと、それ以来、留岡幸助を軸にして研究をしてきた。またその後、研究所に於いて『六合雜誌』の研究、『七一雑報』の研究、『教会研究』、『山室軍平の研究』、そして現在も『石井十次の研究』等に参加させて頂いているが、いわばその周辺作業の中からこうしたものが生み出されたものである」(五三四頁)。この『キリスト教社会福祉思想史の研究―「一国の良心」に生きた人々』と本書の性格は似ており、『留岡幸助の研究』(不二出版、一九九八年)を核とする室田保夫社会福祉史研究をより広げるものとして本書も位置づけられるように思う。これらの著作を前提に読み進めると、本書の理解はより深まるはずである。

同じ視点から、もう一点解説したい。「社会福祉の歴史は貧困史を中心にして近代史の歴史的方法が大きな影響力をもっていたが、それだけで充分であつただろうか。具体的には経済史や政治史がそのベースになっており、社会史、民衆史、生活史といったものへの応用が弱かつたのではないか。これまで経済史や政治史を中心にして近代の説明がなされてきた傾向があるが、生活といった些細な日常性にも歴史があり、その集積が歴史を構成する面もある。もちろん慈善的行為や博愛、そして社会事業といったことの限界を指摘することでもなく、また逆にそれを過大に評価しようとしているのではない。その実態をみていくことが重要なのである。さらにその実態を対象化しながら、個別の事象を全体との関係の課題として、肉薄していくことの必要性を指摘しているのである。」(四四四頁)これは、本書

の「結びにかえて」からの引用である。この点については、著者の編著である①『人物でよむ近代日本社会福祉のあゆみ』（ミネルヴァ書房、二〇〇六年）、②『人物でよむ社会福祉の思想と理論』（ミネルヴァ書房、二〇一〇年）のなかの関係する記述を参照すべきである。

①から

・「近代における社会福祉は、イギリスに典型に見られるように一般に、慈善事業、社会事業、社会福祉といった大きな三つの歴史的段階がある。一方、近代日本の歴史は慈善事業、感化救済事業、社会事業、厚生事業、そして第二次世界大戦後の社会福祉といったような時期区分で説明されることが多く、その背景には社会福祉について、その時代が生み出した典型的な用語（言説）が前提とされている。ここには日本の特異性が指摘されているけれども、細分化されすぎているきらいもある。」（二頁）

・「社会福祉の歴史をみていくとき、福祉国家論の枠組みを背景にして、往々に国家の社会福祉政策の歴史に比重が置かれてくる。つまり国家政策の貧困性を背景にして民間の事業から出発した事業は、次第に人びとの権利意識や国家の責任論となり、国家政策（福祉）の発展にいかにも集約されていくかの傾向をもつ。しかし社会福祉は単線的に展開してきたのではなく、さまざまな組み合わせのなかで複合的かつ重層的に、かつ蛇行的に進んでいくものである。」

（同）

②から

・「社会福祉学がその性格から、ときには社会福祉、社会福祉事業、社会福祉論などと呼称され『学』を意識的に排

除して呼ばれるのも、『学としての社会福祉』の成立を曖昧なものにしてきた要因でもある。」(二二頁)

・「社会福祉において学というより、論や思想といったまだ高度に整理されないような領域にとどまることがある。思想と理論・学説と明確に分化されたいものが生まれるが、これは社会福祉独自の性格に依拠するものであろう。外来から影響を受けていることや科学の未定立という背景もあるけれども、人々の主観的な想いや思想が理論という名の中に埋め込まれている。つまり実感の領域で語られるために、経験が共有されないとそこには深い溝がで、何ら構造化されていかないという現象も生じてきた。」(三頁)

・「社会科学において『人間と社会』、そして『時代と状況』の中で学の体系化が計られ、社会福祉の理論は単に問題解決という現実的な志向だけでなく、現象を対象化し、抽象化されたところに学問が成立していくのだから。社会福祉学が適合する科学を基礎にして理論の構築が計られ、そして定立されていくものである。」(六頁)

このように語られる著者の問題意識は、「歴史としての社会福祉」「福祉の複合性と重層性」「職業としての社会福祉と社会福祉学」にある。著者が本書を「序説」あるいは「基礎研究的なもの」とされているのは、これらの問いを見据えてのことと思われる。そして、このなかでとりわけ評者の目を引いたのは「福祉の複合性と重層性」である。というのも、評者は「こしばらく」(自身の専門である)「社会政策」と「社会福祉」(さらには、「社会保障」、「公衆衛生」)の概念規定をめぐる問い、いいかえればそれらの関係性について考察を進めてきた。その初期段階にある評者が、本書から得た示唆は大きかった。例えば、本書には金井延や桑田熊蔵をめぐる記述が見られた。両者は、日本の社会政策学会創設に大きな役割を果たした人物である。その両者のうち、金井は『六合雑誌』に窮民や社会問題をめぐる議論、桑田は『博愛社月報』に労働問題をめぐる議論を展開していたこと。この事実は改めて、社会政策と社

会福祉の関係性をめぐる問いに評者を引きつけた。このように、本書が浮かび上がらせてくれた数々の人的ネットワークがもたらしてくれる今後の課題は豊富である。

最後に、読後感のようなものを記しておこう。著者は本書を通じて追い求めるものを「もう一つの近代」と表現している。この「もう一つ」という言葉が、評者の心に強く響いた。以下の一節とともに。

「人々は何のために生きているのか。社会は何を基準にして構成されるのか、あるいは正義とは何か、といった哲学的かつ倫理的価値は普遍的に存在し、また、それはとりわけ往々に時代の変革期において勃興する。たとえば社会福祉の分野においても、社会福祉の言論の不在的状况と合致して、経済学者のアマルチア・センの考え方が評価されたり、ロールズの正義論やアレントの公共哲学、あるいはサンデルの政治哲学に関心が集まっていくのも現在が一つの時代変革の節目、換言すれば福祉哲学への渴望の反映かもしれない。」(四頁)

*本稿は、「同志社大学人文科学研究所第三研究、二〇二二年度六月例会」(二〇二二年六月一日)での報告原稿をもとに作成している。当日ご出席くださった皆様に、記して感謝いたします。

参考文献

- ・室田保夫『キリスト教社会福祉思想史の研究―「一国の良心」に生きた人々』不二出版、一九九四年。
- ・室田保夫『留岡幸助の研究』不二出版、一九九八年。
- ・室田保夫編著『人物でよむ近代日本社会福祉のあゆみ』ミネルヴァ書房、二〇〇六年。
- ・室田保夫編著『人物でよむ社会福祉の思想と理論』ミネルヴァ書房、二〇一〇年。
- ・玉井金五・杉田菜穂「日本における〈経済学〉系社会政策論と〈社会学〉系社会政策論―戦前の軌跡―」『経済学雑誌』第一〇九卷第三号、二〇〇八年。
- ・杉田菜穂『人口・家族・生命と社会政策―日本の経験―』法律文化社、二〇一〇年。
- ・杉田菜穂「戦時期日本社会政策論の一考察―大河内一男・海野幸徳・沼佐隆次―」同志社大学大学院総合政策科学研究科総合政策学会『同志社政策科学研究』第一三卷第一号、二〇一一年。